隠岐島西郷方言の文アクセント

神部宏泰

西郷は、隠岐島「島後」の南東部に位置する、当地方第一の都邑で、政治・経済・文化の中心地である。この西郷におこなわれる生活語を、いま、かりに、西郷方言として把握する。本稿では、この西郷方言の文アクセントをとりあげようと思う。

文アクセントとは、文の、個別的な抑揚を指して言われる。この文アクセントを通じて観るとき、いくつかの特質傾向が認められる。

西郷方言に認められる文アクセントの、著しい特質傾向としては、「後上がり」「後下がり」の二形式を指摘することができる。

以下には、西郷方言の一代表として、飯田部落の生活語をとりあげ、右の、文アクセント傾向について記述しよう。

一

はじめに、「後上がり」傾向をとりあげる。

○コッチ┐ クッダ┘。
　こちらへ来るのだ。
○ナンカ┐ スカヌ┘。
　なんだかすかない。
○エット┐ ツッタ┘ カエ。
　たくさん釣ったかい。
○クチ┐ ウゴカス┘ ナ。
　口を動かすな。
○ミンナ┐ ハナ┐ サエトッタ┘ カ。
　全部、花は咲いていたか。
○オスト┐ イッショダ┘ ニ。
　雄と同じだよ。

これらは、文の直接要素である話部のほとんどに、「後上がり」の抑揚が見られる。この「後上がり」は、当該部分の、最後音節が卓立している。この卓立のしかたは、多分に唐突であって、聞く者の注意をひく。そして、ここに、一つの特徴を感じさせる。

○ドッチガ┐ ガイナ コエオ スッ カ。
　どちらが大きい声を出すか。
○ザイモクガ┐ タクサンナケー。
　材木がたくさんだから。
○オチャガ┐ アリマス カ。
　お茶がありますか。
○ハナタニ┐ ゴワンス。
　端にあります。
○ニシェンネンニ┐ ナッタ モヨーデス。
　二千年になった様子です。
○デンオ┐ モッチョーマシェンダケ ノ(。
　おかねを持っていませんからね。
○ドコノ バタダ。
　どこの三輪車だ。
○ウシデ┐ ヤッチョーマス。
　臼でやっています。
○ソトワ┐ アブナインジャ。
　外はあぶないのだ。
○ショーチューワ┐ ウレル ワ。
　焼酎は売れるわ。

これらは、文の最初に、「後上がり」の抑揚が見られる。この、「後上がり」も、当該部分の最後音節が卓立している。しかも、卓立のしかたが唐突であって、聞く者に、早くも特異さを感じさせる。

これらの例文で、卓立しているところは、いずれも、当該部分最後の助詞である。助詞がくると、そこに、卓立音が移るようなこと

であれば、「後上がり」を、安んじて言うことができる。

右のような特徴部分は、文の最初のみでなく、他のところにも出る。

○ソシタラ　アトガ|　ヨー　ナカラー　ガー。
　そうしたら、後がよくなかろうね。
○フト|ノ　ケンブツニ|　イク　トコダケ　ノ。
　人が、見物に行く次第だからね。
○チョット　マタ　サイゴーデ|　ヤル　フーデスケー　ノー。
　ちょっと、また、西郷でやる様子だからねえ。

一文全体の抑揚に、きわだった特徴部分が存在すると、全体の抑揚は、その特徴部分によって特色づけられる。こうして、全体の抑揚が、特異なものとして把握されてくるのである。

われわれは、以上のような文アクセントを通じて観て、ここに、「後上がり」の特質傾向を認めることができる。

○コッチ|ノ　ミコシ|モ　オンナシ　コン|ダ。
　こちらの御輿も同じことだ。
○デッタイ　デンデス　ワー。
　ぜったい出ませんわ。
○オドリ|ガ　サムシ|ー　ゴワンス　ワー。
　踊りがさびしうございますわ。

これらの例文の、第一・二話部にも、「後上がり」の抑揚を見ることができる。この抑揚は、先述のものと異り、当該部分の、終りから二音節目が卓立している。が、後方卓立の効果は依然として大きく、これも、「後上がり」の傾向をになうものとすることができる。

二

以上では、「後上がり」傾向について記述した。ついで、「後下がり」傾向をとりあげる。

○ヨル|ワ　ヤメマス。
　夜はやめます。
○ソゲ|ナ　コト　シテ　ヤッ|チョリマス。
　そんなことをしてやっています。
○トダナ|ノ　スミ|ー　オイ|チョリマショーッタ。
　戸棚の隅へおいていました。
○ザイモク|ガ　デ|マショーッタ。
　材木が出ていました。

これらの例文には、最後の部分に、「後下がり」の抑揚が見られる。この、初頭の卓立音から、一気に低音が続く「後下がり」は、聞くからに特異さを感じさせる。

中国本土の、島根・鳥取・岡山・広島の各県の人の抑揚だと、たとえば、「ヤ|メマス」は、「ヤメ|マス」あるいは「ヤメ|マス」となるのがふつうである。このような中国本土がわから、右の「後下がり」を見たとき、「マス」の「マ」までが低音部にあるほどの、異常な音の下がりかたに、すぐさま特異さを感じるのである。

○クラ|ヨシデ　イッパクシテ　アル|キマシタ。
　倉吉で一泊して歩きました。
○ソレ|ワ　ワタシモ　シリ|マシェンダ。
　それは私も知りませんのだ。
○フネデ|　イキ|マショー。

舟で行きましょう。

○コノ　クライヨカ　ミチガ　アキマシェヌ。

このくらいしか道があきません。

○イナカワ　ツマリマシェン。

田舎はつまりません。

○ンマトワ　スッポント　チガイマスダケ。

〈昔は〉今とは全然違いますから。

これらの例文でも、最後の部分に「後下がり」の抑揚が見られる。これらは、いずれも、当該部分の第二音節が卓立している。が、卓立音以下、異常に低音が続き、すぐさま特異さを感じさせる点では、先述の、初頭に卓立音のあるものと同様であって、共に、同じ傾向に立つものとすることができる。

この特徴部分は、文の最後のみでなく、他のところにも出る。

○スイシャワ　ヘリマシェヌ　ワー。

水車は減りませんわ。

○マタ　タノミマスケー　ノー。

また頼みますからねえ。

○イマ　ウチニ　オリマシェンケ　ノ。

今は、うちにいませんからね。

飯田生活語では、卓立音が、特徴部分の初頭にあるものより、第二音節にあるものの方が、優勢である。

○ヨー　ハナサレマス。

よく話されます。

○ワレワレ　コシラエマスダケ。

自分自分で作りますから。

○モー　ショグニワ　ナカナカ　ツカレマシェヌ。

もう職には、なかなかつかれません。

○ヨラズニャー　モドラレマシェン。

寄らずには帰られません。

○エキレーダケワ　ファイクゥンシテ　カエラレマシェー。

駅鈴だけは拝観してお帰りなさい。

これらの例文でも、最後の部分に「後下がり」の抑揚が見られる。これらは、いずれも、当該部分の第二・三音節が卓立しているが、その卓立音から、異常に低音が続いている点で、先述のもの同様の、「後下がり」に立つものとみることができる。

右のような、きわだった特徴部分が、一文全体の抑揚を特色づけ、これを、特異なものとして把握せしめることは、先述したとおりである。

さて、以上のような、特異な抑揚を通じて観たとき、われわれは、ここに、著しい「後下り」の特質傾向を認めることができるのである。

この種の特質傾向は、中国地方では山口県下に著しい（藤原与一先生「日本語方言『アクセント』の研究――特異な下降調を持つものについて――」〈音声の研究・第八輯〉参照）。

三

以上、飯田生活語に認められる文アクセント傾向として、「後上がり」「後下がり」の二形式をとりあげた。この文アクセント傾向は、飯田生活語にのみでなく、全西郷方言に認めることができる。

隠岐の、他地域における文アクセントの様態は、もとより単純ではない。が、これらを通じて大観するとき、結局、そこにも、西郷

方言に認めたのと同様に、「後上がり」「後下がり」の二特質傾向を、認めていくことが可能なのではないかと思う。

隠岐の文アクセントについては、究明すべき問題が、多く残されている。

（熊本商科大学講師）